

## 芥川龍之介における「下町」の意味

高木, 利夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

1982-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005243>

## 芥川龍之介における「下町」の意味

高木利夫

## 一

芥川龍之介は明治二十五年、新原敏三の長男として東京市京橋区（現・中央区）入船町に生まれたが、生後八か月で母親フクが発狂したため、母の実家である芥川家に引き取られ、そのままそこで成長した。と言っても、正式に芥川家と養子縁組を結ぶのは明治三十七年で、龍之介はすでに十二歳になっていた。それは実母のフクが死亡し、フクの妹フユが後妻となって異母弟得二が生まれ、新原家を嗣ぐことに決ったからである。それまでには実父敏三が「こちらに逃げてこい」とそそのかしたこともあったというから、当然新原家側から戻してほしいという申し入れがあったことは想像できる。だが、子供のいなかった芥川家では龍之介を手離す気にはなれなかったであろうし、龍之介の中にも離れられない感情のきずなが生まれていたのであろう。特に母親がわりに彼を育ててくれた伯母フキとの関係はもう切りようのないものになっていたに違いない。

龍之介はこうして芥川家のひとり息子として成人することになったわけだが、その家は東京市本所区（現・墨田区）小泉町にあった。典型的な東京の「下町」である。現在、小泉町という町名は廃止されていて、両国×丁目というまことにそっけない町名に変わっているが、国鉄両国駅に近く、旧国技館である日大講堂が望める一帯で、小商店が軒を連ねていて、殺風景な印象を与える町である。「大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だった。」（『大導寺信輔の半生』一、本所）と芥川が書いた回向院も昔のままの場所にある。が、震災と戦災、二度の大災害を受けた本所は、芥川が少年時代を過ぎた明治中期のそれとは町のたたずまいもまるで変わっているに違いない。しかし、装飾や情緒など、生活以外の要素を剥落させたような乾いた町の雰囲気はそう変わっているとは思えない。江戸の街が本所、深川にひろがっていったのは、徳川幕府が開府されてから半世紀、明暦三年（一八五七）の大火の後だった。以後、町人の町として栄えたと言われるが、昭和二年五月「東京日々新聞」に発表された回想記で芥川は「明治二三十年代の本所は今日のような工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的大勢住んでいた町である。」と書いている。本所は単に町人の町であつたばかりではなく、旗本や御家人、御用商人なども混っていたのである。芥川家も代々御奥坊主であつた。そういう徳川家と縁故のある連中が、戊辰戦争に敗れ、明治と年号が変わってからも、置き忘れられたようにひっそりと住んでいた町だったというわけである。「彼の記憶に残っているものに美しい町は一つもなかった。殊に彼の家のまわりは穴蔵大工だの駄菓子屋だの古道具屋だのばかりだった。それ等の家々に面した道も泥濘の絶えたことは一度もなかった。」（『大導寺信輔の半生』一、本所）

この表現にそれほど誇張はないであろう。こう後に回想される町に芥川は明治四十三年の秋、一家をあげて新宿二丁目の実父新原敏三の持ち家に転居するまで住んでいたのである。その年、龍之介は十八歳になって、旧制第一高等学校に無試験で入学したばかりであつた。

ひとは何歳ぐらゐまでその精神の骨格を形成するものだろうか。幼少年期の十八年間をいわゆる「下町」である本所で過したということ、それも芥川家という江戸以来の旧家の家族関係の中で成人したということは、芥川の

精神形成にどのような影響を与えているのか、そしてそれが彼の文学にどう反映しているのか。

旧制高校での生活は、人間としての基礎を作るのに重要な時期だった、とよく言われる。現代ならさしづめ大学生活の、特に前半の二年間に相当する時期である。なぜ重要なのか。一つには年齢から見て、大人へと脱皮する関門の意味がある。だがそれなら、高校を卒業して勤め始めた企業だって、同じような意味を持っていなければならない。とすると、年齢よりもっと大きい意味を持っているものがあるはずである。それは幼少年期を過ぎた場所である故郷の風土の中でひとは若木にまで成長したわけだが、その若木を故郷という土壌から根っこごと引き抜いて、社会というもっと広いけれど、無機的な、人間の体臭が稀薄な土壌に植えかえることだったのではないだろうか。そういう荒っぽい作業をへずには、多分、精神の骨格はでき上らないのである。旧制高校が全寮制度をとったのも、植えかえ作業の一つだったのだろうし、現在、若者たちが故郷を離れて、都会の大学や職場を目指して出てくるといっても、本人は意識するにせよしないにせよ、一種の植えかえ作業なのである。

しかし、ひと口に植えかえ作業と言っても、そう簡単にできるものではない。その根はやはりあくまでも故郷の風土で養われたものであり、本来、他国の土壌には適合しにくい頑固な何かを含んでいる。精神形成の上では、相当厄介な存在なのである。そこである人は、根っこを完全に吹っ切る、つまり否定することによって成熟することを得た。故郷という「個別」を捨て去ることによって「普遍」に到達することに成功したわけである。だがそのかわり、人工的な、架空の存在のような印象を周囲の人々に与えることになる。人間臭を喪失するという代価を支払ったのである。ある人はまた、他国の土壌では生育しない根っこのために、そのまま枯死してしまう。あるいは、枯死寸前に故郷に戻っていったて甦える道を選ぶ。そして大部分の人は、成熟か枯死かの中間で彷徨っているのが現実ではなからうか。

それでは芥川はどうであったか。芥川にとって、本所は故郷であった。小林秀雄が指摘したように東京人には故郷がないとするなら、その根っこを本所で養われたと言いかえてもよい。そして芥川は、終生、この東京の下町で養われた根っこを植えかえる機会を持たなかったのである。そのために彼は、根っこの呪縛から脱れることができ

ず、極言すれば、ついに根っこによって骨がらみにされてしまったのである。

芥川は一高に入学しても寮には入らなかつた。一年生は全員入寮する決まりになつてははずだが、特例が認められたのかどうか、とにかく自宅通学である。大正二年の九月、東京帝国大学英文科に入学。大学でも勿論、自宅通学である。自宅は本所から新宿に移つていたわけだが、彼が大学二年の大正三年には田端に転居している。下町からは離れたものの、しかし下町の生活習慣を色濃く残している芥川家の雰囲気は少しも変わつていなかつた。このことは取るに足らぬ些事のように見えるが、芥川の精神形成を考える上では見逃すことのできない事実なのである。

芥川は多分、毎日、エレベーターにでも乗つていような気分を味わつていたに違いない。学校に行つた時にはエレベーターは急速に上昇し、それが自宅に戻つてくると一挙に下降するという日々である。それも、学校がエリート校だっただけに、落差はいっそう激しかった。学校は抽象的な、観念が支配する世界である。精神は昂揚し、現実を超えた次元に飛翔する。ところが、いったん自宅へ帰つてくると、そこには現実がある。生活がある。しかもそれは、濃密な親愛の感情で結ばれた下町の家庭のそれである。孤立は許されない。まして、宇野浩二がその著『芥川龍之介』の中で繰り返している「心優しい芥川」には、いくら息苦しくても、養父母や伯母に対して拒絶的な態度など取れるわけがないのである。精神は地上に引き戻されるしかない。思考は持続せず、観念は色褪せたものになってしまう。観念と現実との乖離を芥川はいやでも実感しないわけにはいかなかつたであらう。

地方から上京してきて、寮か下宿に入った学生の場合と、この点が大きく違ふのである。上京組は、学校から帰ればひとりになれる。現実の象徴である故郷は遠く、意識の中から断ち切れることも容易であり、学校で学んだ観念の世界、抽象の世界をそのまま持続することができる。こういう生活を二年なり三年なりつづければ、観念の次元に飛翔したまま新たな自己を造ることも可能になるだろう。根っこの植えかえに成功したことになる。地方から上京してきて、革命運動に入つていく学生の精神上の図式も、あるいはこれに当てはまるかも知れない。

芥川が家を離れて生活したのは、大学を卒業した大正五年の十二月から大正八年の三月まで、横須賀の海軍機関学校に嘱託の英語科教官として勤務していた時だけである。夏目漱石に作品『鼻』を賞讃され、新進作家として認

められるようになったばかりのこの時期が、生涯の中でも最も幸福であつたろうと言われているが、しかし、純粹にひとりて下宿生活をしていたのはわずか一年二か月ぐらいのもので、大正七年の二月には、塚本文と結婚して鎌倉に新居を営んでいる。余りにも短い独居の期間である。根っこを吹っ切る余裕はない。新婚家庭には伯母のフキがときどき遊びに来ていたようで、

「彼は結婚した翌日に『来匆々無駄費いをしては困る』と彼の妻に小言を言った。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の『言え』と云う小言だった。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言っていた。彼の為に買って来た黄水仙の鉢を前にしたまま。……」（『或阿呆の一生』十四、結婚）

というようなことも起つた。しかし、それでも二人にとっては愉しい日々であつたに違いない。妻文の語つた思ひ出を中野妙子という人が記録した『追想・芥川龍之介』という本がある。その中で文は、「二人限りの生活でしたし、私はもっと鎌倉にいたかったのですけれど」と述べている。

しかし、二人きりの生活はわずか一年で終わる。芥川は機関学校を辞めて、大阪毎日新聞社の社員となり、田端に引きあげてくるのである。養父母と伯母、三人の老人がいる家である。文の追想記には、この田端の家の様子が遠慮がちに述べられているが、その中から家族の微妙な人間関係がうかがわれる個所を引いてみると、

「主人はこの養父に、大阪毎日新聞社からの給料を、私達と、また子供が生まれてからは子供の生活費として全部渡しておりました。私は養父から月々五円ずつ貰って、子供達の費用や、身廻品、衣類、それに私の雑費に当てていました。ですが当時としても決して豊かな金額ではありませんでした。」

「養父母と伯母が家事全般を扱っていましたが、直接主人の食事のことなどで私が煩わされたことなどありませんでした。」

芥川家は皆質素で、一汁一菜式のもののようでした。」

「或日、主人は自分の著書にサインをして、私の弟の塚本八洲に送本するようにと言いつけました。私は二階の書齋にかけ上り、いそいそと小包をこしらえて、そのまま郵便局へ持ってゆき、発送して来ました。帰って来ると、

伯母に呼ばれました。どのようなことでも一応私に報告してから、行動するようにと言われました。」

「二人きりでいることはめったにありませんでした。まして二人で一緒に外出するようなこともありませんでした。それでも二人で主人の着物を買に行ったことがあります。(中略)私達は、豊田ちぢみを買ってかえりました。さっそく伯母に呼ばれて、自分に相談をしないで買って来たといつて、機嫌を損ねられ叱られてしまいました。」

「伯母は」主人が亡くなるまで、『龍ちゃん、龍ちゃん』と呼びました。」

「主人はほとんど毎日のように伯母の肩をもんでおりました。」

「そんな年寄り達の中での生活が、主人には何となく、一つの重荷になっていったのではないかと、思ったりいたします。」

三人の老人は、芥川の死後もまだ存命だったのである。比喻は悪いが、蜘蛛の巣に捉われて身動きできないでいる虫の姿が彷彿としてくるではないか。しかし、死に際して、友人の小穴隆一に次のような遺言を残している芥川である。どうしてその柔かく粘りついてくる糸が断ち切れようか。

「僕は勿論死にたくない。しかし生きているのも苦痛である。他人は父母妻子もあるのに自殺する阿呆を笑うかも知れない。が、僕は一人ならば或は自殺しないであろう。僕は養家になり、我儘らしい我儘を言ったことはなかった。(と言つよりも言い得なかつたのである。)僕はこの養父母に対する『孝行に似たものも』後悔している。しかしこれも僕にとってはどうすることも出来なかつたのである。今、僕が自殺するのも一生に一度の我儘かも知れない。」

さらに、文の『追想・芥川龍之介』から引用すると、

「主人は、なにかから逃れるためか、また何かをふっ切るためにか、鶴沼へ来たように思えてなりませんでした。『龍ちゃんどうしたの』と、伯母は、なんでもかでも、主人から何かを聞き出そうとします。主人は、伯母からたとえどんなことでも、聞かれることを避けているようでした。」

「主人は亡くなる年の前に何となく急に、『鎌倉を引きあげたのは一生の誤りであった』と言ったりしました。」

痛ましい感じのする言葉である。「一生の誤り」は誇張でも何でもない。もし、芥川がそのまま鎌倉に永住していたら、と後世のわれわれでも考える。そうしたら、あるいはあれほどまでに陰惨に追い詰められなくてもすんだかも知れない。

## 二

芥川龍之介が『あの頃の自分の事』『私の出遇った事——蜜柑・沼地』など、自分の体験した事柄を材料にした作品を発表したのは大正八年である。『鼻』を発表した大正五年に『父』という十枚ばかりの自伝的な短編があるが、そのほかは主に古典や歴史から材料をとって、彼の分類に従えば、「話のある小説」を書いていたのが、この頃から、いわゆる「話のない小説」にも手を染めるようになってきたのである。保吉物と言われる、身辺雑事を材料にした一連の作品は、大正十二年から始まっている。その中には、彼自身の少年時代をもとにしたと思われる『少年』という作品もあるが、本格的な自伝的作品は、大正十四年の『大導師信輔の半生』が最初である。しかし、この作品は中断してしまい、以後、大正十五年に『点鬼簿』、昭和二年、死後の遺稿である『齒車』『或阿呆の一生』などの作品が発表されている。

なぜこのように変化してきたかについては後で触れるつもりであるが、これら自伝的な作品の中で芥川は、かなり真率に下町について、また家族や肉親について述べている。養父母や伯母についても、彼としてはそれが精いっぱい、の叛逆であっただろうが、嫌悪感を、あるいはもっと強い憎悪の感情を書き記している。

「彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかった。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じていた。(中略)彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合うものは苦しめ合うのかを考えた。」「(『或阿呆の一生』三、家)

「信輔の家庭は貧しかった。尤も彼等の貧困は棟割長屋に雑居する下流階級の貧困ではなかった。が、体裁を繕う為により苦痛を受けなければならぬ中流下層階級の貧困だった。退職官吏だった彼の父は多少の貯金の利子を除け

ば、一年に五百円の恩給に女中とも家族五人の口を飼<sup>たく</sup>して行かねばならなかった。その為には勿論節儉の上にも節儉を加えなければならなかった。彼等は玄関とも五間の家に——しかも小さい庭のある門構えの家に住んでいた。けれども新らしい着物などは誰一人滅多に造らなかつた。父は常に客にも出されぬ悪酒の晩酌に甘んじていた。母もやはり羽織の下にはぎだらけの帯を隠していた。(中略)

彼は只見すばらしさの為に彼を生んだ両親を憎んだ。殊に彼よりも背の低い、頭の禿げた父を憎んだ。父は度たび学校の保証人会議に出席した。信輔は彼の友だちの前にこう言う父を見ることを恥じた。同時にまた肉親の父を恥じる彼自身の心の卑しさを恥じた。(中略)

けれどもこう言う見すばらしさよりも更に彼の憎んだのは貧困に発した偽りだった。母は『風月』の菓子折に つめたカステラを親戚に進物にした。が、その中味は『風月』所か、近所の菓子屋のカステラだった。』(『大導寺信輔の半生』三、貧困)

「憎んだ」という表現が多いのに驚く。だが、そういう強い言葉を使つてはいても、彼の生涯を見てみると、感情表現から一步踏み出して、何らかの行動を起そうとする気構えを示したことは遂に一度もなかつた。晩年に妻と三男也寸志の三人で鶴沼に滞在しているのも、養生が目的である。我慢強いというより、受身の強さのようなものを感じさせる。そこには優しさ、弱さというだけではすまされない、もっと重要な何かがある。それはなまの感情を押し殺しても、表面さりげない素振りを装いたがる心性とでもいうか、養父母の偽善として憎んだ「体裁を繕う」心性が、彼の場合にも同様に働いていたと思えないのである。吉本隆明はそれを「構え」であると指摘して、次のように述べている。

「芥川はたぶん一度も、よく稼ぐ温厚な思い遣りのある息子(養子)という肉つき<sup>ニクツキ</sup>の仮面を生涯、母方の伯母夫婦である養父母に取り外してみせたことはなかつた。芥川の晩年の口ぐせを借用すれば『のみならず』妻子や友人たちにもまた、この仮面は着けおおせたにちがいない。その意味では仮面と呼ぶよりも素面になりきつた「構え」とみてよかつた。そしてこの「構え」をしつらえるほどその裏側で、陰惨な近親憎悪を育てあげていった。この近親

憎悪たるや自己憎悪の変形にほかならないために出口がなく、ますます熾烈に人性の底のほうでくすぶりつつけた。〔『悲劇の解説』〕

しかし、こういう心性も、多分に東京の下町でつちかわれたものだったのではないか。それほど下町という土壌で育った根っこは深かったということではないだろうか。

東京の下町については、最近特に感傷的な思いこみが流行している。隣近所助け合う美風がいまだに残っているという思いこみである。しかもそれが商業上の思惑とからむために、いっそう騒々しいさわぎとなる。もともと下町には、人間が肌と肌でじかにつきあえる情愛のある町というイメージが先入見としてあり、それが相互に無関心な大都会の人間関係に対する一種のアンチ・テーゼとして浮び上ってきたのであろう。だが、これほど現実と遊離したブームもない。下町がそんなに住みやすい所なら、人々は大量して移動していくはずではないか。

確かに下町では交際が濃密である。隠し事はできない。よく言われるようにその日の晩飯のおかずまで知られてしまうし、亭主の給料の高も子供たちの学校の出来も、親戚にどんな連中がいるかということまで、ほとんど分かってしまう。洗濯物が並ぶ路地には一日じゅう子供たちの喚声が満ちているし、時たま子供を叱る母親たちの金切り声が響く。金棒引きやお喋り好きのおかみさんたち。井戸端会議は江戸時代以来の習慣だし、隠し事をしようとしても、たちまち聞き出されてしまう。人の心の中で覗きたがる人たちなのである。

こういう町で気取ってみても始まらないわけだが、しかし、自己が自己であろうとすると、これほど困る町もないのである。まるで心の内側をひっくり返して、外にさらけ出して歩いていような町なのだから、自意識の敏感な人間ならいたたまれなくなる。こういう場合は、周囲に対してどう対処したらいいのか。多分、二重の操作を必要とするだろう。表面は愛想よくニコニコとして、いちおう磊落につきあいながら、心の中ではそれと反比例する強さで堅固な壁を作る。人を内側に入れない囲いを作っていくのである。表と裏、二重の人格を意識して作るわけである。芥川的好んだ言い方に従えば、「ドッペルゲンゲル」を作るわけだ。自己認識とは、孤独でなければ不可能な作業である。自己を保持しようと思ったら、こうして閉鎖的になるしかないのである。

閉鎖的になる傾向は、下町の人に一般に見られる。一見、言葉は柔かいし、口調は滑らかだし、人あたりはいいだが、こういう人たちがいったん見知らぬ人たちとまじると、たいへんな人見知りになり、無口になってしまうのである。まことにシャイであり、路上で兄弟と出会っても、照れて横を向いてしまったりする。そういう無愛想になった時に、彼らは個人になっているのである。それが素顔なのだ。人あたりの柔かさは、むしろ一種の仮面であって、仮面をつけなければ暮しにくい町が下町なのである。

芥川が礼儀正しかったということは、多少の驚きをこめて、何人かの人が書いてある。例えば、岡本かの子は小説『鶴は病みき』の中で、その深いお辞儀姿の異様さを描いているし、妻の文も回想記の中で、

「正月になると、主人の姉が、子供を連れて年始に来ます。主人には暮も正月もありません。二階で仕事をしておりまして、姉が来ていることがわかりますと、原稿にきりがついた所で、下に降りて来て、盥にきちんと坐り、両手をつけて正月の挨拶をしました。」

と書いてある。この「主人の姉」というのは、初め葛巻義定に嫁ぎ、一男一女を産んだ後、夫に先立たれて西川豊と再婚したヒサのことであるが、実の姉に対してすらそうであったのだ。礼儀正しさを仮面と考えれば、これですでに素顔になっていたことを示す挿話かも知れない。

この姉の夫、西川豊は、昭和二年、芥川が自殺した年の初めに鉄道自殺をとげてしまった人物である。家が火事で全焼したのだが、その直前に莫大な保険金が掛けてあったので、放火の嫌疑がかけられたためである。後には借金が残されていた。芥川はその後始末に駆け回らざるを得なくなり、その心労が彼の衰弱をいっそう早めたといわれる。『齒車』はこの事件が重要なモチーフとなっている作品であるが、この小説の中で芥川は「運命の冷笑」という言葉を使っている。「冷笑」とは彼特有の銜いが鼻について、反撥せざるを得ない表現だが、「運命」という受動的な言葉の中には、個人が個人でいられない下町の間人間関係が秘められているような気がしてならない。困いを作って拒絶しようとしても、常にそれを破るうとする力が働いているのである。芥川ならずとも、ついその力に引きずられてしまおうであらう。

佐藤春夫が『秋風一夕話』の中で指摘した「チョッキを脱げない窮屈さ」も、原因は彼のまわりにめぐらされた囲いがあったと考えられる。しかし、囲いをしているという意識が果して芥川にあったかどうかは疑わしいのである。芥川にしてみれば、的確な佐藤の批評もかなり不本意なものであったに違いない。本人は自己をさらしているつもり、裸になっていたつもりであつたらうから。

『もっと己れの生活を書け、もっと大胆に告白しろ』とは屢諸君の勧める言葉である。僕も告白をせぬ訳ではない。僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である。』（『澄江堂雜記』十六、告白）

しかし、芥川の文章は、書けば書くほど自己を囲っていく性格を持っていたのである。感性が外に向って飛躍しないで、内に潜り込んでいく。これは彼が自意識を獲得していったプロセスと似ている。彼は多感な中学時代、自分を外にさらすのを避け、自分を守る形で感性を養っていったに違いない。そのために、感性を外に向って解放する術を身につけることができなかったのである。芥川の文章は読む者をはじき返してしまう。読む者の意識が文章の中を還流し、そして生きるという形にはならない。さまざまな人が自分の文章の中を通過して行って、蘇生するのであれば、書き手にとってこれほどの幸福はないが、芥川の文章はまさにその逆であり、相手は流れに閉じ込められ、息苦しくなるしかない。精巧に組み立てられた彼の文章には、基調低音として、灰色で、単調な、乾いたものが流れている。それは芥川が人生に対して抱いていた虚無の感じであらうが、読者は常にそこに連れていかれるのである。奇妙なことに、同じ東京生まれの三島由紀夫の文章にも、絢爛豪華な言葉の底によく似た性質のものが流れている。

「彼は本郷や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を——回向院を、駒止め橋を、横網を、割り下水を、榛の木馬場を、お竹倉の大溝を愛した。それは或は愛よりも憐みに近いものだったかも知れない。が、憐みだったにもせよ、三十年後の今日さえ時々彼の夢に入るものは末だにそれ等の場所ばかりである。」（『大導師信輔の半生』一、本所）

この作品が発表されたのは、芥川が三十二歳の時である。三十過ぎの男が夢に出てくるのは本所の風景ばかりだと述懐するのは、多分に感傷的な、誇張された表現のように思えるが、しかし、それだけ下町で育った根っこが深

いことをうかがわせるには足る。

だが、それにしても、それらの風景に対して愛とも憐みともつかぬ矛盾した感情を持ったというこの言い方は気になる。故郷に対してこのようなアンビバレンスを持つということは、何も芥川に限らない。芥川の友人であった萩原朔太郎も室生犀星も、その詩の中で痛烈に歌いあげている感情である。しかし、それが芥川の文章になると、逆説や皮肉が多くちりばめられているために、これも彼独特のレトリックの一つのような気がして、強い感銘を与えないし、同時に「憐み」という言葉の持つ響きに、選ばれた人間のみが持つ傲慢な意識が覗いているように思えて、素直に読めないのである。彼の文章が読者をはじき返してしまうのはこういう点にある。芥川自身は告白しているつもりであろうが、結果としては自らを防禦している恰好にしかならないのである。

芥川は余りにも臆病であった。文章の上でも、ある枠をはみ出すことを怖れていた。同じ下町であっても、もっと本格的に貧しい家か、職人の家に育っていたら、彼の文学もあるいはもっと生気のあるものになっていたかも知れないのだが。反抗的な気分の横溢した、エネルギーに満ちたものになっていたかも知れないのだが、しかし、彼の養家は下町では「いい家」に属していた。主人は東京府の土木課長だし、部屋は玄関とも五間、小さいとはいえ庭もあるし、門構えである。格子戸でいきなり路地に面している家が普通なのに。息子は中学に通わせている。たいていの子供は高等小学校を卒えて、丁稚奉公に出るのである。しかも、女中までいる。となると、周囲からは羨望の目で見られることになる。何かといえは陰口の対象となるし、近所づきあいには細心の注意が必要となるだろう。絶えず周囲の目を意識して、怖れなければならぬ。芥川が『大導師信輔の半生』の中で書いている「体裁だけはいつも繕わなければならぬ」というのも、そういう周囲の視線から自らを守ろうとする姿勢を示すものであったろう。

しかも、芥川の家では二重に鑑わねばならなかった。一方では、町の人たちに対して「強者」の立場で鑑をつけながら、片方では、山の手で代表される東京の中央に対して、「弱者」として鑑をつけなければならなかった。劣等感からくる対抗意識が自然にそうさせるのである。そういう矛盾した二重性が、芥川家の人たちの意識をいっそ

う複雑なものにしたのである。芥川の自伝的な小説の文章が屈折するのは、多分、その意識の反映に違いないし、『鼻』『芋粥』『手巾』などの初期の作品で、人の心の裏側を巧みに引きだしてみせたのも、芥川家の裏のある生活の中でつちかわれた心性を示すものであった。それらの作品で彼が提示したエゴイズムは、東京下町の「中流下層階級」の家に見られるエゴイズムの形を変えた表現なのである。存在論的な次元にまで深化せず、生活レベルの認識を出ない印象を与えるのはそのためである。

進藤純孝は評伝『芥川龍之介』の中で、体の弱い、腕白とはおよそ縁遠い、文字どおり大人しい子供であった芥川は、貧困にめげぬ逞しい下流階級の子供たちを羨んでいたに違いない、として、『大導寺信輔の半生』において「妬まれ羨まれ軽蔑される脾弱な信輔を描くよりも、嫉妬し羨望し軽蔑する強い信輔を描いて、自画像としたかったのである」と書いている。

「挑戦に応じ、『お竹倉の大溝を棹も使わずに飛』び、『回向院の大銀杏へ梯子もかけずに登』り、『彼等の一人と殴り合いの喧嘩』をしたのは、同じ『頭ばかり大きい、無気味なほど瘦せた少年』ながら、決して芥川龍之介ではなく、大導寺信輔だったのである。そうして、芥川は、大溝や大銀杏や喧嘩相手の前で膝頭を震えさすどころか、臆病な中流階級の子という秘密も見透かされ、挑戦すらされずに女中に手を引かれて、泥んこになって闘う餓鬼大将や弱虫小僧を眺めていた。」

確かに芥川は、進藤の言うように下町の「坊ちゃん」ではあったろうが、うまくやりおおせたかどうかは別にして、乱暴な行爲もしたと思う。下町の悪童連中は、何もしないでただ眺めているだけの坊ちゃんをそのまま見のがすほどお人好しではない。容赦なく荒っぽい遊びに引きずりこんだはずである。芥川は必死に闘わねばならなかった。

だがしかし、それを三十過ぎの大人になってから誇らしげに書くのは、何も懐かしさや自分の生い立ちを韜晦してみせるためばかりではないのである。中央の山の手の手人種に代表される読者に対して抵抗感が出て、下町の強さを誇示してみせる恰好になってしまったのだ。一種の偽悪的な示威行爲と言ってもよいだろう。そこにも、二重

の屈折があったのである。

## 三

芥川龍之介は空想好きの少年として育っていった。家に閉じこもって読書することを好んだのである。小学校の低学年の頃から明治初期の章双紙や『西遊記』『水滸伝』などの翻案を読み、高学年に進むにつれて、滝沢馬琴、式亭三馬、十返舎一九、近松門左衛門などの江戸文学に親しむようになった。同時代の作家では泉鏡花の小説を愛読した。特に『化銀杏』などの怪奇的、幻想的な作品に魅かれたと言われる。

息の詰るような下町の生活の中では、こうして空想の世界に逃避するしかなかったであろう。自らを閉鎖して、非現実の世界に溺れこむ。それで感性を養うしかなかったのであろう。自意識を獲得していく途上で、ほかに個人が個人であり得る方途が見つからなかったのである。この少年時代の態度が、後の彼の人生に対する姿勢の基本を作った。ばかりか、彼の文学の基軸をも決めてしまった、と言える。

「彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞い上った。同時に又理智の光を浴びた人生の欲びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行った。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまっ直に太陽へ登って行った。丁度こう云う人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にととう海へ落ちて死んだ昔の希臘人<sup>ギリヤン</sup>も忘れたように。……」(『或阿呆の一生』十九、人工の翼)

この言葉ほど彼の文学の特質を示すものはない。書物の中から探しだしてきた人工の翼。術学癖のある芥川らしい比喩であるが、この言葉の中に現実に対する彼の態度がはっきり出ている。書物の中から探しだされたものは、現実のコピーであって、現実そのものではない。彼は現実を超えるのではなく、現実を捨てて舞い上る道を選んだのである。現実を捨象して、その奥に普遍的な世界を構築するのではなく、現実から逃避して人工的な世界を作ろうとしたのである。それは少年時代に自らを閉じこめた空想の世界と同質のものであった。

このような文学的特徴は芥川ばかりではなく、同じ下町生まれの文学者堀辰雄、立原道造にも共通して見られる

傾向であるとして、吉本隆明はその著『言葉という思想』の中で次のように述べている。

「かれらの文学的想像力は逃げ道や、跳躍する場所を、地域の感性にみつけれられないのです。じぶんたちの性格から、家族の暮し向きや、米びつのなかまでわかつているところで、文学的な想像力は行き場がありません。少なくとも主題を生活の感性にとつていくかぎり、想像力は成りたちようがない。」

「ゴミゴミした路地裏の出身の詩人、作家たちです。だからそういう作家たちが実現した世界は、たいへん人工的であり、構成的であり、ある意味できれいで抒情的な世界です。」

「閉鎖的で、人情深く、一から十まで知られてしまっているというのは青年にとって煩しいことでもあります。これらの詩人、文学者たちは、青少年時代に、そうした親密な心情の世界に慰安を感じたに違いありませんが、いっほうで重苦しさ、煩しさも感じたらうと推察できます。その極端な二重性がこれらの詩人、作家たちの作品の世界を決定したといえます。想像力が逃がれていくところはどこかといえば、人工的な、よく構成された、無国籍な感性の世界です。つまりどこにも現実的な基盤がない想像あるいは空想の世界というものに、想像力の活路をもとめる以外になかったというのが、かれらを共通していました。」

深刻な受けとめ方で解釈されがちな芥川の小説も、作者にしてみれば、空想を十分に愉しんだ結果、生まれたものも多かったはずである。初期の作品『羅生門』と『鼻』の二作も、二十二歳の時、従兄妹である少女に恋をし、結婚まで考えたが、養父母と伯母の反対にあつてついに諦めざるを得なかったという経験をした。その後、「半年ばかり前から悪くこだわった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった」(『あの頃の自分の事』)のが動機で生まれたのである。まさに「見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら」「人工の翼をひろげて」「空へ舞い上った」作品ということになる。

だが、芥川の悲劇は、この「空へ舞い上る」ことと「見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落す」こととの微妙なからみ合いの中に隠されていたのである。空へ舞い上るなら、何も見すばらしい町々の上へ反語や微笑など落す必要はなかった。もっと完全に現実を無視すればよかったのである。捨てればよかったのである。だが、それが

芥川にはできなかった。

これは前に触れたことであるが、芥川の初期の作品は、生活レベルでの逆説的認識を展開の重要なかぎに使うことよって成り立っている。それは技法上の問題ばかりではなく、少年時代に心に刻みこまれた生の形が彼の中に頑固に残っていたことを示すものである。いわば、根っこがそうさせたと言える。だから彼の作品は、枠組は空想の世界で構築しながら、その枠組の中に現実のコピーを詰めこむ形になってしまったのだ。根っこがある限り、彼には現実を超えることはできなかった。舞い上ったつもりになれなかった。にもかかわらず、「反語」や「微笑」などという及び腰の、しかも傲慢で、気取った態度で対そうとしたから、後で強烈な復讐を受けなければならなかったのである。現実とはもったいなかったかなものだ。

しかし、芥川には予感があったであろう。気になって仕方のないその根っこが、いつかは徹底的に邪魔になる時が来るという予感が。そのために自分が滅びに向うかも知れないという予感があったであろう。そして、いつかはそれを完全に吹っ切らなければならない、と思っていたに違いない。自分自身を超えたい欲求、飛躍したい欲求が彼にはあった。その欲求を満すためにはそうするしかないと感じていたはずである。

だが、根っこにさわるのはこわい。芥川はそこで大正五年に『父』、大正八年『あの頃の自分の事』『私の出遇った事——蜜柑・沼地』、大正十二年『保吉の手帳から』、大正十三年『少年』という具合に少しずつ近づいていった。戻ることによって、吹っ切ろうとしたのである。「話のある小説」から「話のない小説」へと向う筋道は、こうした東京下町でつちかわれた根っこへの回帰だったのではないかと、私は考える。

亡くなる数か月前、谷崎潤一郎と論争になった『文芸的な、余りに文芸的な』の中で芥川が強調したのは「話のない小説を最上のものとは思っていない。が、若し『純粋な』と云う点から見れば、——通俗的興味のないと云う点から見れば、最も純粋な小説である」ということであった。いわば「話のない小説」は「詩に近い小説」であって、彼がイメージとして思い描いていたのは、志賀直哉に代表される心境小説であった。自身の作品では『厩気楼』がそれにあてはまると考えていただろう。『厩気楼』は相当自信のあった作品らしく、滝井孝作あての葉書に

も「一番自信を持っている」という文面が見えるほどで、「話のない小説」の主張もこの自信から導きだされたのではないかと疑わせるくらいだ。だが「話のない小説」は必ずしも詩に近いものばかりではない。自伝的な小説の中には、当然詩的要素に欠けるものも含まれてくる。それらの自伝的な作品と心境小説ふうの作品との間を芥川は厳密に区別して考えてはいなかったようである。

しかし、両者の間には、作中の「私」の扱い方に大きな違いがあるのである。心境小説は、作中の「私」をなるべく抑え、その感受したものを描くところに特徴がある。「私」は目になり、耳になり、鼻になり、感受性そのものと化すわけである。そして、描かれたものが「私」の心の象徴となる。つまり、「私」を抑えることによって、逆に「私」を浮び上げようとするのである。それに反して、自伝的な小説では、まっとうから「私」に挑んでいかなければならない。作中人物の「私」を解剖の対象として、冷静にメスを入れていかなければならない。時には「私」は切りきざまれて、消滅してしまうことだって出てくるのである。平野謙が前者を「救いに向う文学」、後者を「滅びに向う文学」と区別したのも、ポイントはその点にあった。

芥川が心境小説ふうの作品に魅かれたのも、危険を察知した臆病さの現われかも知れないが、しかし、そういう傾向の作品では直接根っこに触れることができないのも分っていたであろう。触れなければ、根っこは吹っ切れない。芥川は『大尊寺信輔の半生』『追憶』『点鬼簿』と、自伝的な作品にも少しずつ手をつけるようになった。だが、自伝的な作品において、自己の精神形成の過程を追う「教養小説」の場合は、作中の「私」は作者によって肯定されている。ところが、芥川の場合は、作中の「私」に対して初めから否定的な心情で臨んでいたように見える。否定的、という表現が強すぎるとすれば、本当は目をそむけていたのに、という気持が先立っていたと言いかえてもよい。そのために「私」を見る目に歪みが出、「私」をまるごとすくいとることができなかった。「私」は逃げ場を失って、追い詰められてしまうほかほかであった。

昭和二年に発表された『西方の人』『続西方の人』は追い詰められた芥川が、最後の脱出口として「永遠に超えるもの」を求めた結果である。しかし、自己を受難の人クリストに擬したところで、それは観念の世界でのことで

あった。宗教は自己を捨てるという現実の行為を前提としなければ成り立たないものである。しかし、自意識の強い芥川には自己を捨てることはできない。救済は訪れはしないのである。自殺は最後に唯一つ残された飛躍の方法であった。

「彼はいつ死んでも悔いがないように烈しい生活をするつもりだった。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活を つづけていた。」(『或阿呆の一生』三十五、道化人形)

彼は実生活の中で飛躍すべきであった。激しい行為をすべきであった。同じく東京下町生まれの作家谷崎潤一郎は、関東大震災を契機にして関西に移住した。谷崎の文学が大きく開花するのはそれ以後であるが、それはよく言われるように関西の風土が彼の感性に適していたからだけではない。故郷である東京という土地から離れたからである。根っこを吹っ切ることができたからである。以後彼は、自己を客観的に、一步距離を置いて眺めることができるようになり、永遠の主題ともいうべきものを見つけたことに成功した。同じく東京は山の手の生まれではあるが、町人の出の夏目漱石は、二年半に及ぶイギリス留学で、根っこを吹っ切った。彼が小説を書き始めるのは、留学から帰国した後である。どちらにしても、東京生まれの作家にとって、根っこの存在はかなり厄介な問題をはらんでいるのである。